

ちがいを越えて、心で向き合い共に生きる

矢野デイビットさん / ミュージシャン、タレント、一般社団法人 Enije 代表、明星大学客員講師

外国ルーツの子どもとして児童養護施設で過ごした少年時代。多彩な活動の原動力である「誰かのために生きたい」という想いが育まれた背景に迫る！



かながわ国際交流財団では、2015 年度より神奈川県立総合療育相談センターの児童福祉施設職員研修に協力しています。児童養護施設で育つ外国につながる子どもが増えています。研修では外国につながる子どもと家庭の状況をお伝えするとともに、矢野さんに「外国につながる子どもの気持ちを考える」と題し、お話しいただいています。ガーナ人のお母様と日本人のお父様のもとガーナで生まれ、6 歳で日本にやって来た矢野さんに、ご自身の経験とアイデンティティ、そして人との出会いと向き合い方についてお話を伺いました。

急激に増える外国につながる子どもたち

日本で生まれる子どもたちの中で、両親のどちらかが外国籍の子どもの割合についてご存知ですか？実は今「27 人に 1 人」（2016 年人口動態統計より）が外国にルーツを持っている子どもだそうです。これすごく驚きますよね。ちなみにその一年前は「30 人に 1 人」でした（2015 年同統計）。一年間で、変わっているっていう実感がなかなかわかないですけど、あと 10 年後

にはどうなっているんでしょうね？

閉鎖的と言われることがある日本でも、こうした変化が起っていて、どんどん日本はグローバル化していくでしょうから、国境という概念も影が薄くなって、いろんな人たちが世界を流動している時代がすぐそこまで来ている感じですね。おそらく 10 年後 15 年後には、この割合も今より増えているでしょう。その中で、普通に日本語を話して、自分が日本人だと認識して育つ子どももいれば、まったく日本語がわからなくて、突

然日本にやってきて、言語や文化的なサポートが必要な子どももかなり増えてくるということですね。

過渡期にある受け入れられない人たち

今までは、一見して日本人に見える人だけが日本人だったのかもしれませんが、そうではなく、外国人にも見えるような、いろんな容姿をした人たちが日本人として当たり前になる時代が来ると思うんです。今はその過渡期とも言える時期で、だんだん変わってきてはいるけれども、やっぱりまだそうした人を日本人としては受け入れられない人たちかもしれませんが、それでも、受け入れられない人たちがマイノリティとなる社会になってくるのではないのでしょうか。

僕自身は国籍が日本なのに、マンションなど賃貸の住宅を借りることが難しいんです。大学もちゃんと卒業して、家賃を払える収入があって、日本語で自分のバックグラウンドを含めていろんな話をしても、2件に1件、もしくは3件に2件ぐらいの割合で——不思議なことですが——この容姿が理由で貸してくれないんですね。

みんなが交わる世界／日本の明るい未来を創る教育を

たとえば、外国から来た最初の世代は「ここで働けるぞ！やった！」と思うのですが、2世代目、3世代目になると、その国で生まれ、その国で育つので、自分たちはその国の民として生きています。ということは「どうして自分たちはこんな不自由な目にあっているのか？」と、その背景を理解できないまま育つ子どもたちもいます。

そして、彼らの多くは、それがたとえば日本であれば「なんで自分たちは日本の国籍を持っていて、日本語しか話せないのに、この国は受け入れてくれないんだ、そういう差別的な見方をするんだ！？」という憎しみがふくらんできて、その国のことをよく思わなくなってしまうでしょう。みんなが交わる、かわっていく多様性のある世界や日本の明るい未来を創っていくためには、「外国につながる子どもへの教育」、「受け入れ社会の子どもへの教育」はどちらも果たす役割は大きいだろうと思っています。

日本の食事に苦勞した養護施設での子ども時代

僕は3人兄弟ですが、子どもの頃、家庭の事情で兄弟たちと兄

童養護施設に入っていました。日本の食事に慣れない僕らのことを先生たちが気にかけて、実験的に僕らのご飯だけ洋食にしてくれました。みんなが鮭とか、さんまを食べている横で僕らにはハンバーグが出てくるのです。他の子どもたちから「なんでデビットたちだけそんなハンバーグ食っているんだよ」という意見が出て、結局、2週間ほどで取りやめになってしまいました。

先生のあいだでは「彼らの食べられるものを食べさせてあげるべき」という考えでしたが、周りの反応から僕らに対する憎しみになってしまう可能性があるということを心配した結果でした。それからは「日本食を食べなさい」と言われ、しっかりと教育していただいたのですが、僕としては、正直なところ、結局和食は苦手です。ただ、どこかの時点で食に慣れる必要があるとは思います。

小学校のクラスメイトと今、話していること

僕は養護施設から地域の学校に通っていました。はじめは施設の中と外の世界との違いから生まれてくるいろんな問題があったけれども、ただ僕は今でも小学校の時のクラスメイトとご飯を食べたりします。

その時に彼らと話していて感じることは、彼らの中には小学校時代に僕のような外国につながる子や児童養護施設の子たちと育ったという経験があるので、マイノリティを偏見なくありのままに受け入れることができる大人になっています。

日本では違うものや面倒くさいことがあると、フタして見ないふりや考えない傾向が強いと思うけど、そういったものに向き合う経験は大事だなと、改めて気づきましたね。そして、そうした経験がもたらす未来はものすごく大きいですし、異質なものと関わるからこそ次の世代として進化してくるものがあるんだと思います。

理解のある先生との出会い

僕のいた施設の園長や寮長は、文化やいろんな見方あるいは哲学などについて、ものすごく深く勉強している人たちでした。

「児童養護施設に来る子どもたちが抱える障害や乗り越えてはいけない壁として、どんなことがあるかわかりますか？まず最初にあるのは、家庭から突き放されたという『苦』、2つ目は社会から隔離される中で生活していくという『壁』です。これらに加えて、違う文化圏の子どもたちには、自分自身の文化



児童養護施設で働く職員みなさんに自らの想いを語りかける（2017年10月）

からも引き離されて施設に来るということ、そしてさらには、まったく違う文化の中で生きなければいけないという『壁』があるのです。つまりは、彼らは施設の他の子どもたちより一歩二歩下がったところからスタートしなければならないのです」と言ってくれたのを今でも覚えています。

ぶつかっていきながら何がいいのかを探していく

すごく不思議に感じるのは、日本では人と関わる時に「言わなくてもわかるでしょ。察してね」というかたちをとることが多いせいなのか、「ちゃんとこれは言うべきなのかな」ということで悩む人が多いですね。でも、これからの日本ですごく大事になってくるのは、失敗をすること、とにかくやってみることが大切なのではないかと思います。

身近なところで言えば、同じ日本人の中でもそれぞれがいろんな関心や趣味をもっていて、互いに100パーセント理解できるものはないかと思います。みんなのベクトルが違うので当たり前だけど、でもそれは話してみたりぶつかってみたりしないとわからない。なので僕は「最初はぶつかってみなくちゃわからないこともあるかもしれないけれどやっていこうね」といったことが大事だと思います。まあ、日本語でどう表現したらいいのかわからないこともあるので伝えるのも難しいんですけどね。

ともかく、いろんなことでぶつかっていきながら何が一番いいのかを見つけていくしかないですね。仮に背景となる文化が

自分の親のものとは違う、日本という国で生を受けたのであれば、これから世の中とぶつかりながら生きていくしかないかと。ただ、その彼らのためにも、僕たち私たちがぶつかっていくことが大事ではないかなと思います。探っていく、というよりは、ぶつかっていく勇気を持つということですね。

一人の人間として自分を育てていく

外国につながる子どもと向き合うには、「ほかの子と違う部分もあるんだよ」ということも大事にすることもあるし、さらには「人間としていかに育ってもらうか」というのがとても重要です。僕自身は、自らのアイデンティティについて悩んだ時期もありましたが、その中で、日本人あるいはガーナ人としてではなく、一人の人間として自分を育てていこうという気づきがありました。

自分をいじめたり、虐げたりする人に対して憎らしく思うってしまう日本の生活の中で、日本っていやな国だな、となっちゃうんですよ。ただガーナにいてもそういう目にあって、その時に考えたのは、日本でもガーナでも自分を外国人として扱い、虐げた人もいたけれど、僕の人生に自分事のように向き合ってくれた人たちが何人もいたことでした。特に児童養護施設の先生たちは、女性の先生もいましたが、荒れている僕に対して、力だって僕の方が強いのに、「しっかりしなさい」と胸ぐらをつかんだり、「あなたはそういう人じゃないでしょ」、「しっかり生きなさい」と本当にバチバチにぶつかってくれました。

自分の人生と向き合ってくれた人のことを思い出して、そういう人たちのことを考えた時に「自分は何に対して誇りを持つべきなのか」と思いを巡らせました。そして、自分を大事に思ってくれた人たちがどういう人たちなのかを振り返った時に、それは肌の色とか文化で自分を判断しない人たちだったんです。そういう人たちを自分の人生のモデルにすれば、そんなこと（自分を虐げる人たちのこと）はどうでもよくなったんです。それに気づいてから、自分も自分を育ててくれた恩師たちと同じように、出会う人たちを一人の人間として見ていく、そして自分自身も一人の人間として育てていくことにしました。

2つのルーツを持つ子には2つのことをしっかり伝える

また、子どもたちがアイデンティティについて向き合うためにも、年齢によって関心の有無はあるかもしれませんが、2つのルーツを持っているという認識を持たせて育てるべきだと僕は思います。ハーフの人たちの場合、特にアジアのハーフで見た目では周りの人はわからない、さらには日本で生まれ育ったとなると一層、わからないことになりますよね。では、その子どもたちが自分の戸籍がどうなっているのかとか、仕事をするようになって本名を書かなくてはならない時、もしくは自分がだれかと婚約する時、その相手が家族の家柄として、ひょっとして相手のルーツを気にする場合もまだ日本の風土では残っていると思います。

例えば僕自身が女性とお付き合いしている場合、その女性が「あなたを親に紹介したい」という話になったとします。そうした時に、まずは親に冗談半分で「自分のボーイフレンドが黒人だったらどうする？」とか、「中身は日本人だけど見た目が黒人だったらどう思う？」と聞いてみてごらん、と言います。そうした場合、残念ながら「できればちょっとやめてほしいかな」

と答えてしまう親中にはいるのではないのでしょうか。日本の社会で生きていく以上、国籍や見た目が違うことで、そうした壁にぶつからざるを得ないんです。大人になって、そうした、自分ひとりじゃ抱えきれないほどの壁にぶつかったときの思いや気持ちを整理するためには、きちんと向き合ってくれる人が必要です。

だから子どもの頃から、「あなたには2つのルーツがあるから、日本だけでなくその国のことを一緒に勉強しよう」と伝え、そして教えていくのは大切だと思います。さらには、それを伝えた人が、その2つのルーツをもつことによる葛藤を抱えた時に相談できるような相手になってほしいと願います。

心と心が向き合うことが大事

これからも増える外国にルーツを持つ子どもたちを、周りの大人たちやあるいは社会全体として、どのように受け入れていくのがよいのでしょうか。私は見栄や偏見を持たずに、人と人としてお互いに向き合っていくことが一番大切なのではないかと思います。

人として僕らは死ぬまで知らなければいけないこと、勉強しなくてはいけないことがたくさんあると思うのですが、それ以上に“心で向き合う”ということが大切だと。それは、一番勇気が必要で、一番難しく、一番傷つく作業ですが、そこで向き合うことで、人と一緒に生きるとはどういうことなのかを自分の中できちっと振り返ることができるのではと思います。



表情豊かにジェスチャーも織り交ぜながら対話を重ねていく



デイビットさんは25歳の時、ガーナでのストリートチルドレンとの出会いをきっかけに「誰にも守ってもらえない子どもたちを守りたい」という想いを抱き、自立支援団体 Enije（エニジェ）を設立。2012年に一般社団法人化し、教育を柱にガーナで学校建設や教育する側への教育、運動会やサッカー大会を行いながら支援を続けています。

20歳の頃、バーテンダーのアルバイトをしていて、一人のお客さんにガーナについて話してほしいと言われました。「6歳から日本に住んで日本の教育を受けてきたので、ガーナのことを知らないのですよ」と答えたところ、「お母さんの文化に興味がないって、またそれを赤の他人に言えるなんて、自分のもう一つのルーツを尊敬していないよ。恥だと思った方がいいよ」と言われとても衝撃を受けました。母親がガーナに帰国して間もないころで、自分とガーナとのつながりとは何だろうと悩んでいたこともあり、すぐに行動して、3週間後に初めてガーナに行きました。

ガーナではタクシーに乗ったらみんなが見てくるので、なぜだろうと思いタクシーの運転手に聞くと、「おもしろいこと言うね。どうみても君は外国人だよ」と言われました。日本にいて外国人と思われる、ガーナに行けばみんな肌の色も同じだから大丈夫と思っていたのに、ガーナでも外国人と思われるでショックでした。帰りの空港で母親から「わざわざガーナまで会いに来てくれてありがとう。ガーナに帰国して以来、あなたたちが日本から来ることがなかったから、ガーナに対して興味がないと思っていた。ガーナまで来てくれて本

当にうれしい」と言われ、すぐにまたガーナに行くことにしました。

2回目のガーナ滞在中に友だちと訪れたレストランで、少年が「お金ちょうだい」と寄ってきました。お金はあげないと決めていたので、顔も見ずに断り続けましたが5分おきくらいにやってきます。いい加減はきり断ろうと初めてその子の顔を見たときに、幼少期の自分とそっくりの顔の少年がそこにいました。あまりの衝撃に自分の人生がフラッシュバックしました。僕が落ち込んだと思った友だちに「この地域は治安も悪いし、大通りを歩くとこういう子どもたちがたくさんいる。気にするな。ランチを楽しもう。デイビットは日本から来たから関係ないよ」と言われたとき、児童養護施設にいたころに経験したあることを思い出しました。

小学生のときに児童養護施設の付近にたむろしていた中学生と喧嘩をして、馬乗りになられて通りがかりの先生に助けを求めたことがありました。しかし先生は中学生の言い分を聞いて、解決してもらえなかったのです。自分が大人になって力を持つようになったら、絶対に見て見ぬふりする大人にはならないということを糧に過ごしてきました。しかしガーナの少年を目の前にして、自分が今、逆の立場としてどう行動するかを問われました。

少年を見つめると孤独さがすぐく伝わりました。彼には3歳の妹がいて、6歳ですでに誰かの人生を背負わないといけな。この状況を見て何かが行動せずにはいられずに、まずは日本に帰って友だちに思いを話し、アイデアや協力を募って僕の国際協力活動が始まりました。

児童養護施設の生活を振り返り、辛いこともあったけど、辛い経験や挫折がなかったら、自分は誰かのために生きたいという考えは出てこなかったはず。考えるきっかけをくれた少年との出会いはまさに運命でした。

◆プロフィール／矢野 デイビット David Yano

1981年4月7日生まれ / 国籍：日本 / ミュージシャン、タレント、一般社団法人 Enije 代表、明星大学客員講師

日本人の父とガーナ人の母との間に生まれ、ガーナで起きた暴動事件の影響により6歳で日本に移住。学業のほかピアノとサッカーを学び18歳まで児童養護施設で育つ。明星大学英文科卒業。

学生時代からモデルやCMの仕事を始め、「ユニクロ」「リカルデント」「エネルーブ」「インテル」などの仕事を経て、「すばると!」「世界ふしぎ発見!」「FOOT×BRAIN」「5時に夢中!」などテレビ番組にも出演。その傍ら、好きだったピアノを通して音楽活動をスタートし都内を中心にピアノの弾き語りを始める。現在ではソロ活動のほか元 J リーガーで作詞作曲家の兄と薬科大学に通う弟とのユニット YANO BROTHERS としてもライブ活動を展開。

25歳の時、ガーナでのストリートチルドレンとの出会いをきっかけに「誰にも守ってもらえない子どもたちを守りたい」という想いを抱く。自立支援団体 Enije を設立。2012年に一般社団法人化し、教育を柱にガーナで学校建設や教育する側への教育、運動会やサッカー大会を行いながら支援を続けている。また社会問題をテーマにしたトークイベント「箱舟に積むモノ」を立ち上げ、当事者を招き社会問題をシェアする活動を行っている。2013年ドキュメンタリー映画「ハーフ」出演以降、主にアイデンティティ、マイノリティ、人種差別、国際交流、多文化共生などをテーマに多数講演。

外国籍県民支援人材育成事業とは？

- ◆財団では、業務の中で外国人住民に関わる方々向けに、講師派遣やセミナー・ワークショップを提供しています。
- ◆増加している外国人住民への対応や、外国人増加に伴う課題、文化や言語の違いなどを研修にカスタマイズしています。
- ◆このインタビューのもととなった児童福祉施設職員向け研修のほか、教員、児童相談所職員、保育士、保健師、民生委員、主任児童委員、警察官などに向けた研修を行っています。

高校国際教育支援事業とは？

- ◆矢野デイビットさんは、財団の高校国際教育支援事業でも講師をなさっています。県内の高校生に向けて、多文化共生やご自身のアイデンティティ、ガーナでの活動などについてお話しいただいています。
- ◆本事業では、財団が培ってきた国際教育*のノウハウや講師のネットワークを活用し、神奈川県内の高等学校等における国際教育を支援します。学校のご希望に沿った適切なプログラム内容と講師をご提案し、プログラムの実施をサポートしています。
- ◆世界各地で起こる紛争や人権問題など地球規模の課題、約18万5千人の外国籍住民が暮らす神奈川県の多文化共生、高校生のロールモデルとなり得る NGO/NPO 関係者や学識経験者との出会い、日本語を学ぶ留学生との交流などをテーマに、講演をはじめ少人数の参加型・対話型ワークショップ等、多様なスタイルで学びの機会を提供しています。高校の先生方向けの研修もお受けしています。

*国際教育とは、国際社会において地球的視野に立って行動するための考え方や能力を育むための教育活動全般を想定しています。



かながわ国際交流財団 (KIF : Kanagawa International Foundation)

神奈川県内で国際交流・協力を推進する中核組織として1977年に設立されました。2012年4月に公益財団法人の認定を受けています。「多様性を尊重する“かながわ”の人づくり・地域づくり」を重点目標として、神奈川県、県内自治体、国際交流協会、NGO/NPO、教育機関、福祉関係団体、企業などと連携しながら事業を実施しています。

【事務所】

本部／湘南国際村学術研究センター	〒240-0198 葉山町上山口1560-39 湘南国際村センター内
	TEL:046-855-1820~1822 FAX:046-858-1210 E-mail: shonan@kifp.org
横浜事務所／多言語支援センター	〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2 かながわ県民センター13階
	TEL:045-620-0011 (代表) FAX:045-620-0025 E-mail: tabunka@kifp.org

※多様性が活きる神奈川のために～ご寄付のお願い～

- 4つの分野から指定できます。
- | | |
|--------------------|--------------------------|
| ①多文化共生の地域社会かながわづくり | ②県民・NGOとの連携・協働による国際活動の促進 |
| ③国際性豊かな人材の育成 | ④学術・文化交流を通じた地域からの将来像の提案 |

振込先（郵便振替）： ゆうちょ銀行 00280-4-49894 公益財団法人かながわ国際交流財団

※通信欄にご希望の事業番号（①～④）をお書きください。ご寄付には税制上の優遇措置が受けられます。
クレジットカード・銀行振込でもご寄付いただけます。

お問い合わせ： 寄付担当 TEL：046-855-1820 E-mail: donation@kifp.org